徳島市　常三島遺跡
埋蔵文化財発掘調査実績報告書

工学部機械工学科棟

1997年10月30日

徳島大学埋蔵文化財調査委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

目次

1　調査地の名称と目的

2　調査地

3　調査期間

4　調査面積

5　調査体制

6　調査にいたる経過

7　発掘調査の成果

8　まとめ

第１図　常三島遺跡の位置
第２図　江戸時代徳島城下町と常三島
第３図　調査地の位置
第４図　工学部機械工学科棟遺構平面図
第５図　絵図と調査地

図版１　調査区全景：屋敷境溝遺物出土状況：屋敷境溝完掘状況
図版２　屋敷境溝土層断面：遺構検出状況：遺構掘り下げ状況
図版３　出土遺物：現地説明会風景

1　調査地の名称と目的

常三島遺跡

徳島大学工学部機械工学科棟地点

（工学部機械工学科棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査）

2　調査地

徳島市南常三島町２－１

3　調査期間

平成８年７月２４日～１１月８日

4　調査面積

１８００㎡

5　調査体制

調査主体　徳島大学埋蔵文化財委員会

委員長　武田克之（徳島大学長）

調査担当　埋蔵文化財調査室　（室長　武田克之）

発掘担当者　東潮

調査員　橋本達也　北條芳隆　中村豊

調査補助員　山本愛子　上田淑子　岸本多美子　井本尚子　安山かおり

6　調査にいたる経過

古文書や江戸時代に描かれたいくつかの絵図などから常三島は近世徳島城下町の武家屋敷用地として確保され、整備された土地の一つであることが判明している。それらの資料によると、現在の徳島大学キャンパス内では家老クラスから10石程度の下級武士まで様々な武士が住んでいたことがわかる。

常三島ではこれまでに徳島大学工学部構内において、工学部実習棟、地域共同研究センター、光応用工学科棟、工業会館、ｻﾃﾗｲﾄﾍﾞﾝﾁｬｰﾋﾞｼﾞﾈｽﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰの各地点で大学教育研究施設の建設工事に先立って埋蔵文化財発掘調査を実施し、近世武家屋敷を中心とする良好な遺構の存在を確認している。よって、調査以前から他地点同様、機械工学科棟地点に近世遺構が良好に遺存しているものと予測され、発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は近代造成土の掘削を重機で行い、その下の江戸時代包含層を人力で掘削した。重機掘削は一部を平成８年２月に行い、残りを７月に行った。人力掘削は平成８年７月２４日より開始したが、８月１０日まではｻﾃﾗｲﾄ･ﾍﾞﾝﾁｬｰ･ﾋﾞｼﾞﾈｽ･ﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰ棟地点の発掘調査に全力を注いでいたため、本格的に機械工学科棟地点の人力掘削を開始したのは８月１９日からである。

［江戸時代遺跡を発掘調査する意味］　江戸時代の歴史研究においては豊富な文献資料の存在から、これに基づく研究が主で、発掘調査にもとづく考古学的な研究は部分的なものでしかなかった。しかし、近年、江戸時代の歴史研究においても文献資料以外に考古学資料が重要な役割をもっている

ことが認識されつつある。遺跡は発掘調査することで当時の生活の具体的な物的証拠を考古資料という形で与えてくれる。日々の暮らし、土木・建築技術、様々な工芸技術、物品の流通、宗教、遊びなどモノを用い、痕跡を残す様々な場面において考古学的研究は有効である。今後、現在までの日本の社会史の実像復元において江戸時代の生活・文化の考古学的研究は一層必要性が高まるものと思われる。

そこで、常三島遺跡を発掘するということは重要な意味を持つ。すなわち、この発掘を通して徳島という地方都市の歴史的発展過程やその地域色、そこに暮らした人々の生活の歴史などを明らかにすることができるからである。それは徳島の現代社会の構造を考える材料となるであろう。

徳島では常三島遺跡のほかに徳島県教育委員会による徳島城西の丸、新蔵町１・３丁目遺跡の武家屋敷、文化の森地区の武家別荘（延生軒）や徳島市教育委員会よる徳島城御殿・鷲の門各地点などにおいて近世遺跡の発掘調査が行われている。

［常三島の歴史環境］　常三島ではこれまでのところ江戸時代以前の遺構や遺物は見つかっていない。今後、確認される可能性はあるが、江戸時代以前には人の生活できるような状況ではなかった可能性がある。江戸時代の包含層を取り除くと、すぐ下は砂層で地下水が沸きあげ、江戸時代以前は三角州であったことがわかる。砂の上に広大な範囲にわたって粘土を張り、屋敷を築くということは、事業を推進する大きな政治力と高度な土木技術とが備わった江戸時代になって初めて可能となったものと思われる。

常三島は江戸時代の武家社会と一体の土地であった。そのため、江戸時代を通して武家屋敷として利用され続けるが、明治時代の幕開けとともに武家社会は解体され、武士は従来の武家屋敷からも離れなければならなくなったようである。遺構や遺物も幕末期までのものがほとんどで、明治になると武家屋敷は壊され、その後、1922（大正11）年に徳島大学工学部の前身、徳島高等工業学校が創設されるまで、常三島は農地などとして利用されたようである。

7　発掘調査の成果

［遺構の概要］　機械工学科棟地区の発掘調査の結果、検出された江戸時代遺構面は大きく前期(17世紀)・中期(18世紀前～中葉)・後期(18世紀後半～19世紀)の３時期に分けられる。新しいものから順に第１・２・３遺構面とした。第１遺構面はT.P.0.20m付近、第２遺構面はT.P.-0.05～-0.10m付近、第３遺構面はT.P.-0.20m付近である。最も遺構数が多いのは後期である。古くさかのぼるにつれ遺構・遺物量は少ない。

調査地点は絵図などの検討から徳島藩士の屋敷と屋敷境部にあたることが想定されていた。発掘調査の結果、第１遺構面では調査区内で５ヶ所の屋敷境部と３屋敷の構造を確認できた。

調査区中央では南北に走る溝が複数確認された（SD03･19･23･25）。ここが東西の屋敷を分かつ境界部になる。５本以上の溝が確認できたが、これは時を経るとともに掘り直された結果と考えられ、同時に併存した溝は基本的に２本と考えらる。溝の間の部分は盛り土で、土手状になっていたと考えられる。すなわち、屋敷境の構造としては土手の両側に溝が巡る構造と考えられる。同様の屋敷境構造は、調査区南西側で東西に走る２本の溝があり、南北の屋敷の境部と確認できる（SD01･02）。また、調査区北西端には東西に走る大きな２本の溝（SD11･12)と土手が確認でき、同様に屋敷境になると考えられる。この調査区中央の南北屋敷境、調査区南西の東西屋敷境、調査区北西の屋敷境に囲まれた範囲が一つの武家屋敷の一角にあたると考えられる。ここをＡ地区とする。

調査区北東隅にも、東西に走る溝がある(SD26)。さらに南東端に一本の東西溝がある。これらも屋敷境を構成するものと考えられる。すなわち、調査区中央の南北屋敷境より東、調査区の南端から北端の範囲が一つの武家屋敷の一角にあたると思われる。ここをＢ地区とする。

調査区はＡ・Ｂ、二つの武家屋敷を中心とするが、Ａ地区の南側にはさらに別の屋敷の一角が確認できる。ここをＣ地区とする。それぞれの屋敷境は18世紀後半以降の遺物が出土している。すなわち、大がかりな屋敷地整備がなされたのはこの時期で、それ以前の時期の屋敷境については明確にはとらえられなかった。

また、各遺構面のそれぞれの屋敷地区内では溝、土坑などを確認した。また、後期には井戸を４基確認し、Ｂ地区の一部では柱穴や粘土を張った土間のような遺構、瓦を並べた区画など建物に関わると考えられる遺構も一部で確認できたが、具体的な建物遺構などは明確にとらえられず、今後の検討課題である。

このほか、明治中期～大正期の畑遺構や池を確認し、武家屋敷解体以後、高等工業専門学校設立の間の土地利用解明の手がかりを得た。

検出遺構　　土坑　３４０基
　　溝　　４４基
　　井戸　　４基など

［武家屋敷の居住者］　絵図・文献等の記録と合わせて分析した場合、発掘調査によって確認された３つの屋敷地の居住者は、以下のように推定できる。

＜Ａ地区＞　江戸後期から幕末期にかけての佐藤家屋敷の裏側1/3にあたると推定できる。幕末期の当主は佐藤文次郎という人物である。しかし、江戸中期の18世紀に、ここは山口平内という人物の屋敷となっている。山口家は平内以降の記録が無く、江戸後期まではつづかなかったようで、山口家の後に佐藤家が入ったものと考えられる。

また、調査区北西の屋敷境(SD11-12)より北は、江戸後期には蔭山家、中期には坂越家であったと推定できる。

各家の家禄・役職はおおむね以下のとおりである。括弧内は代表的な人物の名。

佐藤（文次郎）家＝宝永３年召出。４人扶持８石取り。各奉行職。

山口（平内）家　＝寛永以降、蜂須賀家に仕える。８人扶持１０石取り。諸奉行、中小姓など。元文～延享の山口平内以降、不明。

蔭山（与一）家　＝万治元年召出。６人扶持１３石。小姓など。

坂越（甚之丞）家＝享保頃初出。４人扶持８石。小姓格。元文まで。

＜Ｂ地区＞　代々、原家屋敷であったと推定できる。発掘調査区はこの屋敷地の裏側1/2程度にあたると考えられる。

原（吉之丞）家＝初代は天正１４年召出。７０～１００石取り。代官職、御城山定番や江戸在番を勤める。

＜Ｃ地区＞　代々、鉄砲組頭・民沢家屋敷であったと推定できる。発掘調査区は広大な民沢家のごく一部が入っているに過ぎない。民沢家は常三島武家屋敷の中でも最大の屋敷地を持っている。

民沢（作右衛門）家＝慶長７年召出。１５０～４０７石。初代は大坂夏の陣に御供出陣。鉄砲組頭を世襲し、あわせて小姓、本〆役、目付、奉行職など。

［遺物］ 屋敷境の溝を中心として屋敷境部周辺からは大量の遺物が出土した。最も主要な出土遺物は陶磁器である。その産地は肥前・瀬戸・京・信楽・備前などの広域流通圏をもつ製品と大谷焼などのように在地の阿波・讃岐地域で作られ、狭い範囲でのみ流通したと考えられるものがある。中には九谷焼のように遺跡での出土があまり知られていない製品もあった。陶磁器以外には金属製品・木製品・漆製品などが多数出土している。

出土遺物数	陶磁器類	コンテナ２２０箱
	木器・漆器類	コンテナ４５箱　タッパ２００箱
	瓦	コンテナ１００～１５０箱
	食糧残滓(貝･魚骨)	コンテナ２０

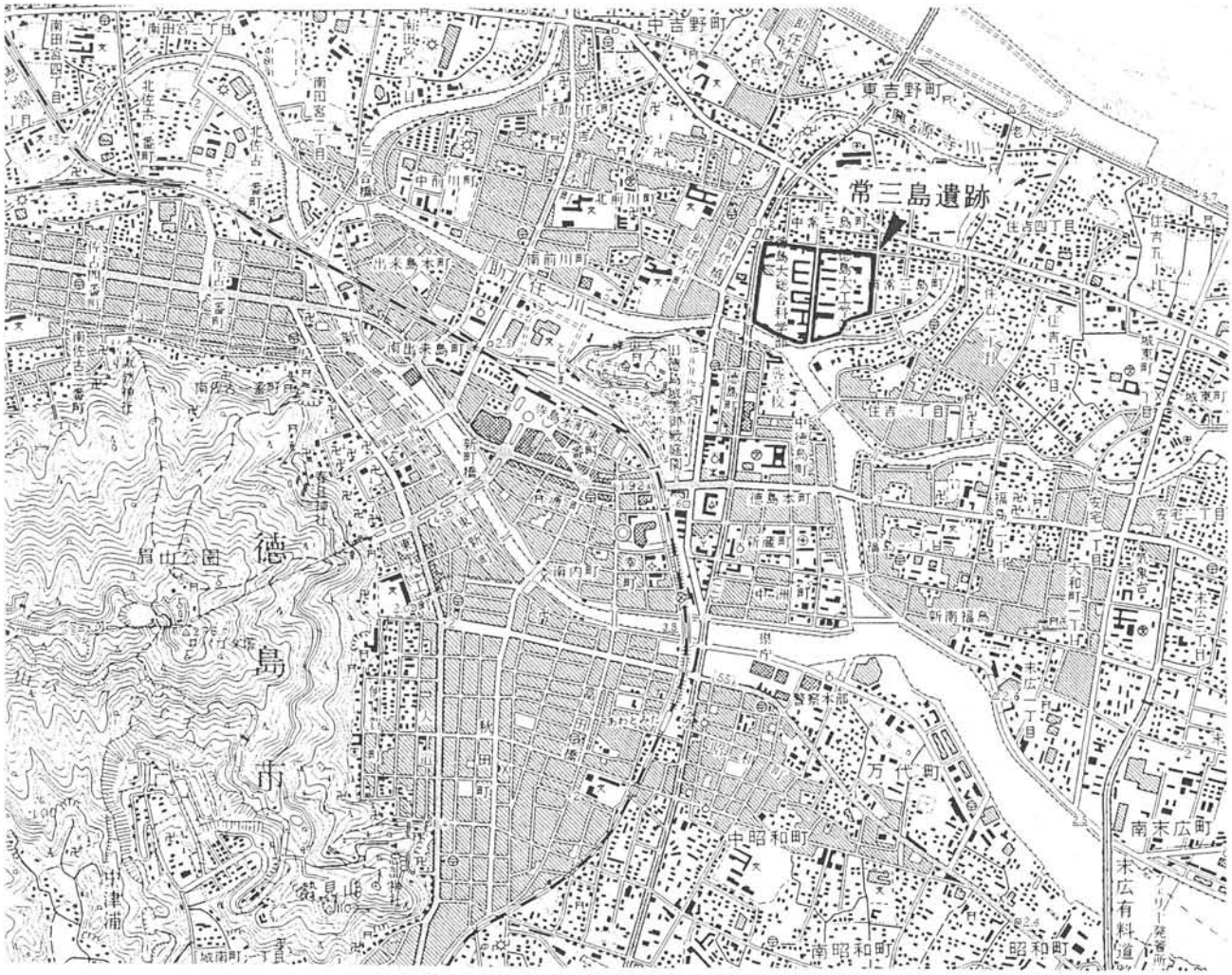
8　まとめ

今回の調査とこれまでの常三島遺跡の調査をあわせ検討すると、近世の常三島の屋敷境は普遍的に土手を中心として、両側に溝が巡る３本構造であったことが明らかとなった。この溝の掘削時期は出土遺物から18世紀後半以降と考えられる。

また、常三島で普遍的に確認できるような大規模な屋敷境構造の造成は、各屋敷独自に行われたものとは考えられない。すなわち、18世紀後半段階に藩の政策として武家屋敷地の造成が行われたと考えられる。その目的には、低地に位置するためたびたび水害を被ることへの対策として溝を掘り排水機能を充実させるとともに屋敷地割（所有権）の明確化による藩士統制などが考えられるであろう。

18世紀後半の徳島藩主は第９代蜂須賀重喜・第10代治昭で藩制の改革期にあたる。現状では、武家屋敷地の整備にかんする文献史的資料などは明らかにされていないが、藩政改革の一環として武家屋敷地の改革が組み込まれていた可能性もあるのではなかろうか。今後の検討課題である。

また、屋敷地内の遺構の分析も現状では十分でなく、屋敷内利用状況など重要な検討課題が多い。遺物の分析による近世徳島の流通構造、地域的特徴も今後に残された検討課題である。



第１図　常三島遺跡の位置

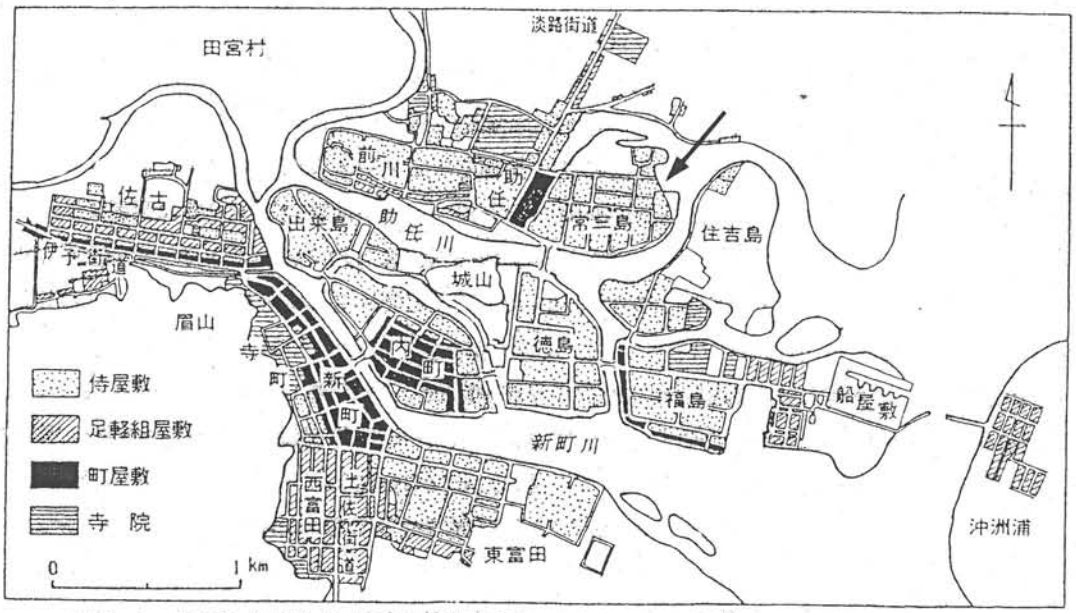
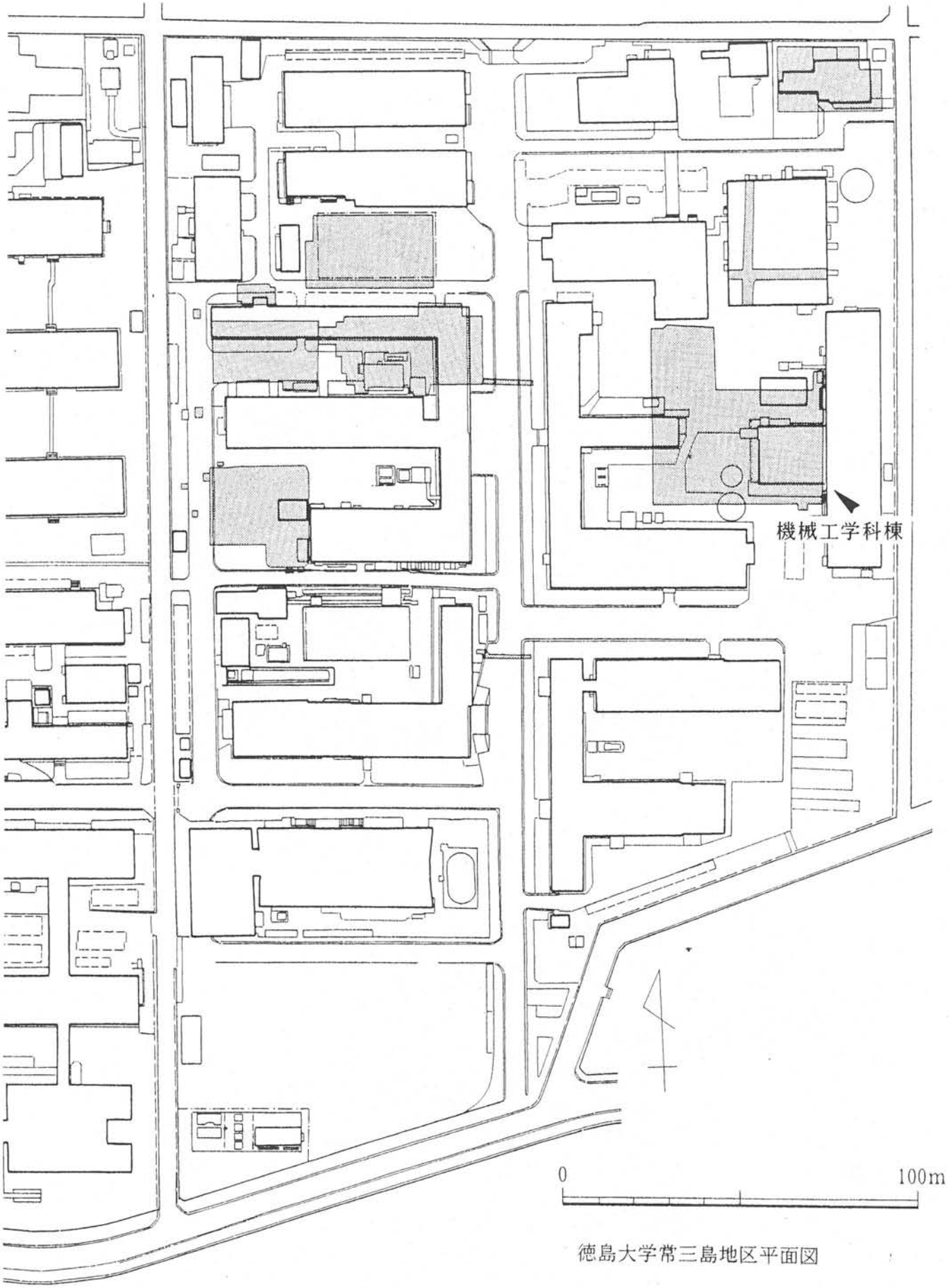


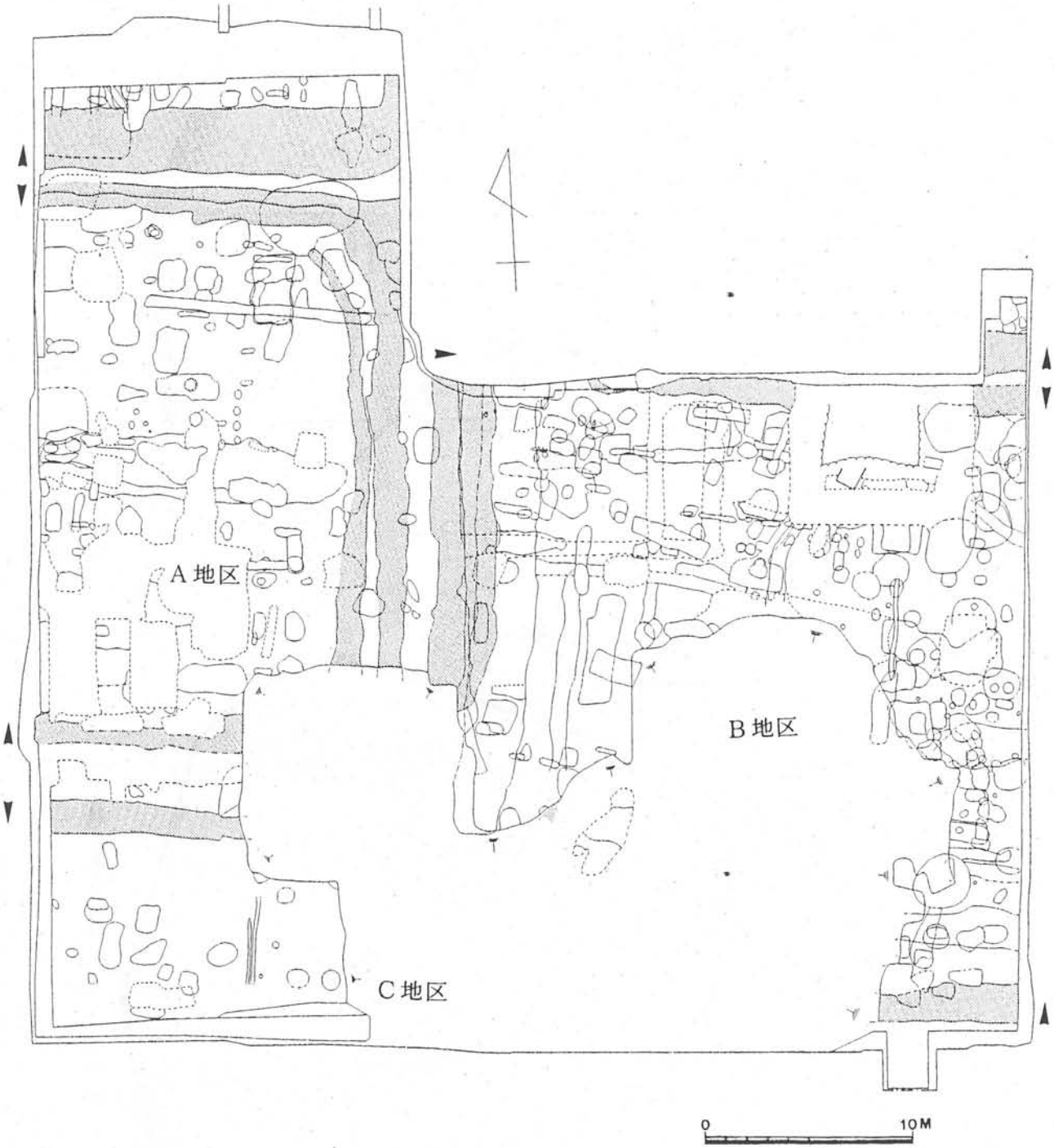
図46－１　寛文５（1665）年「阿波国渭津城之図」（徳島県立博物館所蔵）にみる徳島城下の町割
服部昌之（1966年）原図を一部修正。

平井松午1995「城下町起源の都市徳島」『徳島の地理』

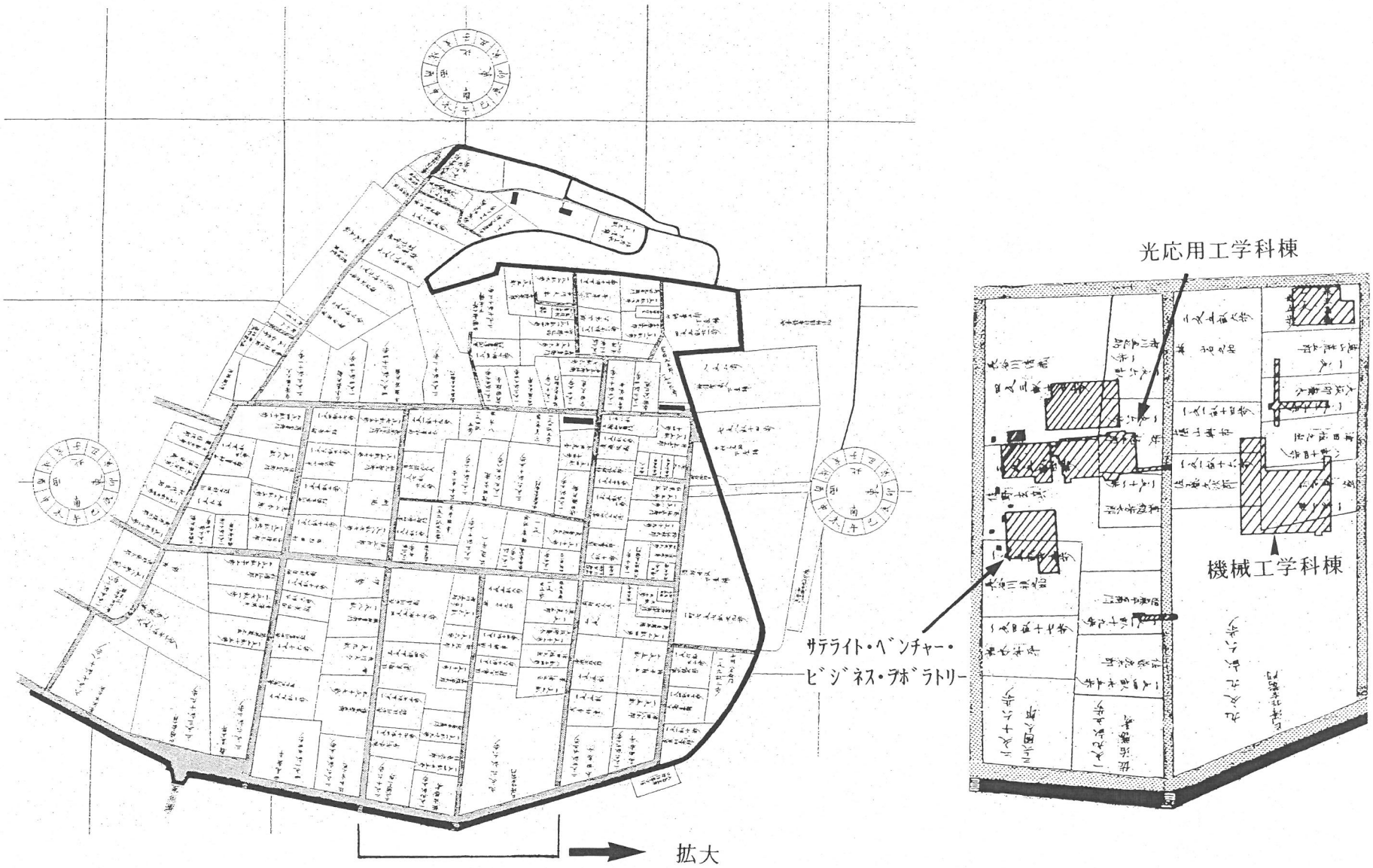
第２図　江戸時代徳島城下町 と常三島



第３図　調査地の位置



第4図　工学部機械工学科棟遺構平面図
ｱﾐ掛けは屋敷境溝

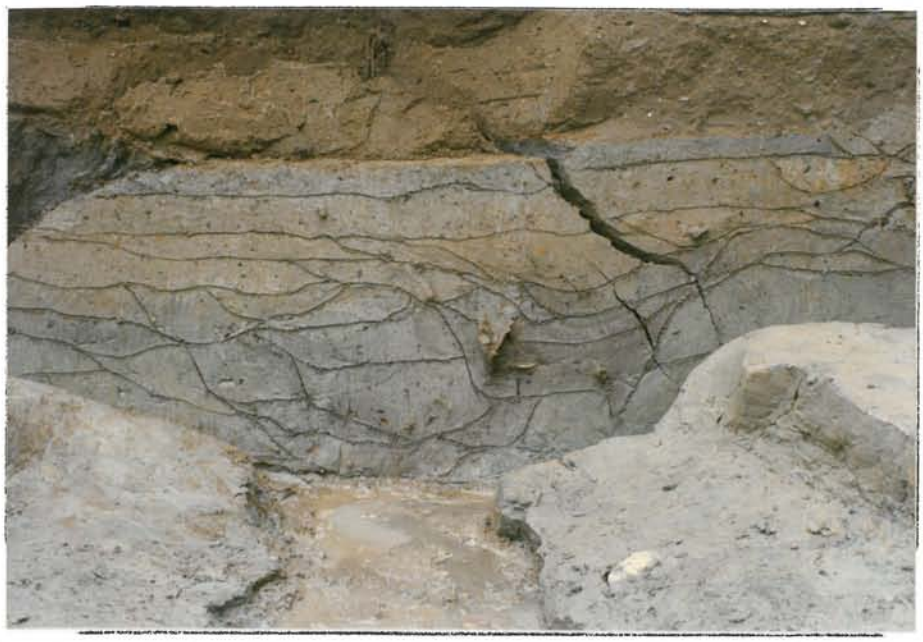


第５図　絵図と調査地
「御山下島分絵図　常三島」　安政年間　個人蔵

調査区全景（北より）

屋敷境溝遺物出土状況
（SD03・23・25 北より）

屋敷境溝完掘状況
（SD03・23・2・44 南より）



屋敷境溝土層断面
(SD12・13)

遺構検出状況
(SK102)

遺構掘り下げ状況
(SK520)

出土遺物

現地説明会風景